

「男、突っ走る！」

第10回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

尾形	五十川	鬼頭	宮田	志田	濱口	木本	門野	木内
安代	孝之	美彩	春奈	悠喜	寧々	賢瞬	哉哉	雅也
(52)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)
中央高校1年2組担任	中央高校1年6組生徒	中央高校1年6組生徒	中央高校1年5組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒	中央高校1年2組生徒

1 木内家・雅也の部屋

雅也が携帯電話で話している。

雅也「……本当にクラス変えるんだ」

2 夜の街

瞬が携帯電話で話している。

瞬「ああ。もう安代ちゃんにも話した」

3 木内家・雅也の部屋

雅也「そっか……こういう時、何て声かければ良いんだろうね……」

瞬の声「うっちーがそんなこと気にすることないよ。クラス変わっても、別に会えなくなるわけじゃないし」

雅也「まあ、それはそうだけど……」

4 夜の街

瞬「二組に入ってなかったら、うっちーとは出会えてなかったんだから。そういう面では、一年生が二組で良かったって思ってる

よ」

5 木内家・雅也の部屋

雅也「そう言ってもらえて、安心したわ。明

日は、学校来てくれる？」

瞬の声「うーん、どうしようかな」

雅也「まあ、嫌いなら無理に学校来なくても

良いけど、やっぱりきのしゅんがいないと

寂しいから」

瞬の声「ありがとう。じゃあね」

雅也「うん、それじゃあ」

と、携帯電話を切ると、ふと寂しい顔

になり、

雅也「クラス、変わっちゃうのか……」

6 中央高校・全景（朝）

7 同・1年2組教室

雅也と賢哉が話している。

賢哉「そうか、あいつからの電話、やっぱり

クラス変わることだったか」

雅也「かどけんは、知ってたんでしょ」

賢哉「まあな。一緒に電車とバスで通ってるんだ。嫌でもそういう話はしてたんだ。だから、木内にも伝えた方が良くって俺があいつに言ったんだ」

雅也「そうだったんだ」

賢哉「こういう大事な話は、事前に木内の耳にも入れといたほうが良いだろ。後から知ったら、お前だってショック受けるかと思ってさ」

雅也「かどけん、俺のこと気にしてくれてたの？」

賢哉「知り合ってもうすぐ一年だぞ。大体お前の性格は分かってるつもりだからな」

雅也「ありがとう。かどけんが、俺のことを考えて、きのしゅんを促してくれただけで嬉しいわ」

賢哉「当たり前前だろ。お前には元気でいても
らわないと困るんだから」

雅也「そりゃ元気でいたいよ。けど、今度は志田が謹慎になったでしょ。全く俺の周りの人たちは、どこまで俺を振り回してくれるんだろうね。喧嘩で謹慎なんて、凹む飛び越えて呆れるわ」

賢哉「でも、全然応えてないんだろ」

雅也「そうなんだよ。謹慎を長期休暇だとも思ってるのかな」

賢哉「俺はそういうつもりで、謹慎課題やってたけどな」

雅也「いけないことをしてしまったっていう、自責の念が、かどけんにはないの？」

賢哉「別に。無断バイトぐらいで大袈裟なんだよ。志田の喧嘩だってさ、ちよつとした喧嘩だろ。何かにつけて謹慎なんてやってたら、今に学年中が謹慎だらけになっちゃうぞ」

雅也「無断バイトだろうと喧嘩だろうと、学校の規則を破ったことに変わりはないですよ。違反をしたから、その代償として謹慎

処分になる。大袈裟も何もないでしょ」

賢哉「この学校に風紀委員会っていうのがあったら、お前なら間違いない風紀委員長になれるぞ」

雅也「別に嬉しくないわ」

賢哉「まあ、いろいろやってたら志田だって何事もない顔で復帰するさ」

雅也「ただでさえきのしゅんがいないんだから、これで志田もいないってなったら、俺たち結構寂しいと思わない？」

賢哉「それは、一理ある」

雅也「でしょ？ だったら、もっとクラスの雰囲気良くしたり、くだらない理由で謹慎にならないようにしてもらわないとさ」

賢哉「はいはい」

雅也「頼むよ、本当に」

苦笑している賢哉。

8 同・コンピュータ室

雅也と孝之が、パソコンを見ながら相

談をしている。

雅也「もう少しなんだけどなあ」

孝之「技能面は問題ないですね」

雅也「やっぱり筆記のほうか、もうちょいな
んだけどなあ」

孝之「頭回らないですね」

と、美彩と春奈が入ってくる。

雅也「あれ、今日随分遅いじゃん」

春奈「ちよっとクラスで、チョコ配ってたか
ら」

雅也「チョコ？」

美彩と春奈、ラッピングされたお菓子

の袋を雅也と孝之に渡す。

美彩「はい。五十川とパンテーンに」

雅也「え！？ くれるの？」

孝之「ありがとうございます！」

春奈「一応手作りだから、味は保証しないよ」

雅也「いや、もらえるだけでもありがたいさ」

美彩「言っとくけど、友チョコだからね。義
理じゃないことは、伝えとく」

孝之「別に義理でも良いですけどね」

美彩「おい、五十川」

雅也「友でも義理でも、こうやって女子から

チョコもらえるだけでどれだけ嬉しいか。

家に帰ったら、美味しく食べるね」

春奈「感想待ってまーす」

雅也「はーい」

物珍しそうに袋を見つめる雅也。

9

木内家・全景（夜）

10

同・雅也の部屋

宿題をしている雅也——何かを思い出したように、鞆から春奈と美彩にもらったお菓子の袋を取り出す。

雅也、袋からチョコを取り出して、食べる。

雅也「おいしい……。(ともう一口食べて)

これ、いけるわ」

美味しそうにチョコを食べる雅也。

11 中央高校・廊下（数日後）

紙袋を持った雅也が歩いている――
年五組の廊下の前にやってくる。

と、中から女子生徒が出てくる。

雅也「あの、宮田春奈さん呼んでもらえますか？ 二組の木内です」

女子生徒「分かった。（と教室に向かって）

春奈、ダーリン来てるよ」

木内「（怪訝な顔で）ダーリン？」

女子生徒「もう来ますから」

と、去っていく――驚いたように女子生徒を見る雅也。

春奈が教室から出てくる。

春奈「あれ、どうしたの？」

雅也「ちよつと来なさい。（と隅に移動し）

え、春奈、俺のことクラスでダーリンって呼んでるの？」

春奈「ダメだった？」

雅也「ダーリンの意味分かってる？ 彼氏さ

んが聞いたら誤解するでしょ」

春奈「ああ、あいつは別れたよ」

雅也「え？」

春奈「あれ、私パンテーンに言ってなかったっけ？」

雅也「聞いてないわ」

春奈「それはごめん」

雅也「いや別に、春奈が誰と付き合ってたよ。あなたが俺の知ったことじゃないけど、さすがにダーリンはまずいでしょ」

春奈「まずいかな？」

雅也「ダーリンなんて呼ばれてたら、他の人たちが『え、そういう関係だったの？』って思うでしょ」

春奈「別に良いんじゃない」

雅也「いや良くないわ。ありもしない熱愛報道流されたら、釈明するの大変なんだから」

春奈「誰も気にしないって、そんなこと」

雅也「何でそんなに呑気なんだろうね」

春奈「で、私に何か用？」

雅也「あ、そうそう。肝心な要件忘れてた。

(と紙袋を渡し) はい、バレンタインのお返し」

春奈「パンテーンが作ったの？」

雅也「うん。パウンドケーキ作ってみた。チョコ作ろうかと思って迷ったんだけど、たまにはちよつと手の込んだものにしてみようかと思って」

春奈「ありがとう！ 後で食べるね」

雅也「うん」

春奈「美彩には渡したの？」

雅也「今朝駐輪場で会った時に渡した」

春奈「同じやつ？」

雅也「一人ずつ違うお菓子作るほど暇じゃないの」

春奈「(苦笑して) それもそうか」

雅也「じゃ、美味しく食べて。感想待ってるから」

と、去っていく——見送る春奈。

春奈「パウンドケーキかあ。(と物珍しそう

に紙袋を見つめる」

12 同・1年2組教室

雅也が戻ってくる——寧々が雅也の元へやってくる、

寧々「今朝くれたお菓子、春奈にも持ってつたの？」

雅也「うん。この間のバレンタインにお菓子くれた子には、お返しで渡してるの。ホワイトデーの日は一般入試で俺たち休みですよ。だから早いうちに渡しておこうと思ってる」

寧々「変なこと聞くけどさ、二人って付き合ってるの？」

雅也「誰がそんなこと？」

寧々「だって、本人が『ダーリン』って呼んでるから、てっきりそういうものかと思ってる」

雅也「だから言ったのに……」

寧々「違うの？」

雅也「（呆れ顔で）……違うに決まってるでしょうが」

寧々「へえ」

雅也「（念押しして）本当だからねッ」

13 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が携帯電話で話している。

雅也「そう。結構早かったじゃない。じゃあ学年末テストは間に合うんだ。でも良かった。志田がどれぐらいで復帰するのか心配してたんだから。うん……ちゃんとしてもらわなきゃ、またこっちだって振り回されるのはごめんだからね。（と苦笑すると）うん、はいはい。じゃあね（と電話を切る）」

14 中央高校・全景

15 同・1年2組教室

安代が生徒一人ひとりに通知表を配っ

ている。

安代「欠席日数は出席簿の通り反映させている。ですが、もし訂正があったら教えてください。部活動についても、記載ミスがあったら教えてください」

雅也、通知表を見ている——賢哉が来ると、

賢哉「どうだった？」

雅也「情報処理検定に合格したことがちゃんと記載されてた」

賢哉「そうじゃなくて」

雅也「（通知表を見て）ああ、成績でいうと……ああ、やっぱり体育だけが悪いんだよなあ」

賢哉「（覗き込んで）悪いって、体育が三で、後は全部四と五ってすげえな」

雅也「かどけんは、どうなの？」

賢哉「体育は四、後は三がほとんど」

雅也「可もなく不可もなくってやつね」

それぞれ通知表を見合っているクラス

メイトたちを見つめる雅也。

雅也「何だか一年早かったなあ」

安代「（一同に）はい、じゃあ今から春休みの宿題配ります。新学期最初の出校日に提出するようにしてくださいね」

賢哉「面倒くせえな、春休みぐらいゆっくりさせてくれたら良いのに」

雅也「しょうがないさ。毎日の課題が毎日の栄養になるって、安代ちゃん言ってたでしょ」

賢哉「そんなこと気にしたことねえな」

雅也「声かけてくれたら、宿題一緒にやっても良いよ」

賢哉「それはやめとくわ。地獄の時間になりそうだから」

雅也「失礼な」

笑い合う雅也と賢哉。

16 木内家・雅也の部屋（数日後）

雅也が宿題をしている——と、雅也の

携帯電話にメールの受信通知が来る。

雅也、手を止めると、携帯電話を開く。

雅也「かどけんから？（とメールを開くと）」

何じゃこりゃ」

賢哉からのメールには、モヒカン頭の

写真が載っている。雅也、メールの返

信をする。

雅也の声「何これ？」

メールを送る雅也——すぐに賢哉から

返信が来る。

賢哉の声「モヒカン」

メールを返信する雅也。

雅也の声「いや、分かってるわ！」

賢哉から返信が来る。

賢哉の声「新学期、これで学校行こうかな」

雅也「何考えてるんだか……」

と、メールを返信する。

雅也の声「そんな髪型で来たら、間違いなく

生徒指導室に連行されるよ」

賢哉から返信が来る。

賢哉の声「ワックスでこの髪型になってるけ

ど、ワックス取ったら多分大丈夫」

雅也「大丈夫かなあ……」

と、新規作成でメールを送る。

雅也の声「ねえ、濱口。この写真見てみてよ。

かどけん、モヒカンにしたらしい」

と、メールを送信する——すぐに寧々

から返信が来る。

寧々の声「随分思い切ったね」

返信をする雅也。

雅也の声「ワックス取った状態で、新学期登

校するらしい」

と、寧々から返信が来る。

寧々の声「絶対バレるでしょ」

雅也「(つぶやいて)だよねえ……」

と、賢哉のモヒカンの写真を見て、

雅也「すげえな、しかし。どうなってるんだ

ろう」

18 同・2年2組教室

雅也が登校してくる——賢哉の周囲に、
寧々と悠喜がいる。

雅也「おはよう」

寧々「木内、これ見てよ」

雅也、賢哉の髪型を見る、唾然として、
雅也「こりやすぐバレるな。だって明らかに

中央と両サイドの毛髪の量が違うもん」

賢哉「そんなに気にならないだろ」

雅也、賢哉の後ろの自席に座り、賢哉
の髪型を見る。

雅也「いや、これは分かるって。自分が思っ
ている以上に、毛の量違うから」

賢哉「マジか」

雅也「どうするの？ 今更髪型変えるわけに
はいかないし……」

寧々「どうしてそんな髪型したの」

賢哉「ちよっとやってみたかったんだよな」

寧々「髪の色変えるぐらいなら分かるけど、

極端にモヒカンなんて」

賢哉「頭髪検査あるわけじゃないし、特に何も言われないと思うけどなあ」

悠喜「どうだろうねえ」

雅也「その根拠のない自信はどこから出てくるんだろうねえ」

と、チャイムが鳴り、安代が入ってくる。一同、席に座る。

安代、賢哉の席に来ると、

安代「門野君、今すぐ生徒指導室に行きなさい」

賢哉「はい」

と、荷物を持って出ていく——見送る雅也たち。呆れ顔でお互いの顔を見合う雅也と悠喜と寧々。

19 同・廊下

雅也と悠喜が待っている——生徒指導室から賢哉が出てくる。

賢哉「あれ、どうしたんだよ。二人とも」

雅也「どうしたじゃないよ。入学式の準備終わって、もう帰りのホームルームも終わったのに、まだ何の音沙汰もなかったから待ってたの」

賢哉「そりゃ悪かったな」

悠喜「それで、どうなった？」

賢哉「髪の毛整えて来いって、明日までに」

雅也「明日？」

賢哉「まあ今から家帰って、すぐ床屋行けば全然間に合うけどさ」

悠喜「髪の毛整えるって、どうするの？」

賢哉「真ん中の毛の量を、両サイドに合わせてもらうぐらいかな」

雅也「だったらいっそのこと、坊主にすれば？」

元野球部なんだもの、似合うんじゃないのかな」

賢哉「ああ、それも良いかもしれないな」

悠喜「せっかくモヒカンにしたのに、もったいないよな。そもそも、生徒指導部は頭髪にいちいちケチつけすぎなんだよ。ワック

スさえつけてなかったら、ちよつと髪のパ
ランスは悪くても、別に極端に変な髪型に
なっていないんだからさあ。それでいちいち
生徒指導部に呼び出したり、うるさく指導
したりしてさ。だから俺、生徒指導部嫌い
なんだよ」

雅也「それが生徒指導部なんだから、しょう
がないでしょ」

賢哉「これで、あと二年も学校生活送れるか
な」

雅也「明日から新学期なんだから、そんな暗
いこと言わないの」

賢哉「確かに」

悠喜「そうだな」

雅也「よし、二年生も張り切って行くよ！」

笑い合う雅也、賢哉、悠喜。

つづく